

占領期の性暴力

…国策売春施設R.A.Aの意味するもの（その3）

Sexual Violence Against Women and Girls
after the Occupation Period in Japan after the World War II
: The Case of R.A.A, Vol. 3

芝田 英昭
SHIBATA Hideaki

要約

これまでの目次

（その1）

1 章 占領期の国策売春施設設置と国や警察の関与

はじめに

1. 占領軍慰安施設設置に国や警察が関与した公文書は存在しないのか
 2. 占領軍用慰安施設としての特殊慰安施設協会（Recreation and Amusement Association=R.A.A）の設立の経緯
 - 1) 内務省と警視庁は占領軍慰安所設置にどう関わったのか
 - 2) R.A.Aはどのように宣伝されたのか
- ・「敗戦期の性暴力 その1」、『コミュニティ福祉研究所紀要』第9号、立教大学コミュニティ福祉研究所、2021年11月。

（その2）

2 章 特殊慰安施設の資金調達と各都道府県の動向

1. R.A.Aの資金調達
2. 内務省通牒を受けた各都道府県警察（一般行政も含む）の動向
 - 1) 山梨県下の状況
 - 2) 神奈川県下の状況
 - (1) 内務省保衛局長通牒により占領軍慰安施設を設置
 - (2) 慰安婦の確保と慰安施設設置状況
 - 3) 群馬県下の状況
 - 4) 埼玉県下の状況
 - 5) 兵庫県下の状況
 - 6) 新潟県下の状況

7) 広島県下の状況

- (1) 広島県における占領軍用特殊慰安協会設置のきっかけ
- (2) 広島県警察や広島県は、占領軍慰安施設設置にどう関わったのか
- (3) 広島県特殊慰安協会の設立

8) 長崎県下の状況

おわりに

- ・「占領期の性暴力 その2 (改題)」、『コミュニティ福祉学部紀要』第24号、立教大学コミュニティ福祉学部、2022年3月。

キーワード：性的慰安施設、特殊慰安施設協会、性暴力、人権

Abstract

It is a little-known fact that shortly after the end of World War II, the Japanese government set up many sexual comfort facilities for the occupying forces. These facilities were under the auspices of the Recreation and Amusement Association. At the time of the establishment of these facilities, many women were exposed to sexual violence by the occupation forces in order to protect Japanese women and girls.

This study considers how human rights were violated and the Japanese population was shielded from the reality of sexual violence during the occupation period in Japan.

Key words: sexual comfort facility, Recreation and Amusement Association (R.A.A), sexual violence, human rights

3章 エゴ・ドキュメント分析による占領軍慰安施設・慰安婦観

—日本人の日記・回想録から見える女性観

はじめに

エゴ・ドキュメントは一人称で書かれた史料を示し、「自己文書」を意味する。長谷川貴彦によると、その史料の形態としては「書簡・手紙、日記、旅行記、回想録、自叙伝、オーラル・ヒストリー、医療健診記録、警察調書、法廷審問、スクラップブック、写真・アルバム、歌、映画、自画像、さらにいえば、落書きまでも含めて考察の対象」[長谷川2020：2] だとしている。

また、19世紀の実証史学では、エゴ・ドキュメントは重宝されたが、その後、商業用に刊行された回想録等における「信憑性」に疑問が提示されることとなった。しかし、1970年代以降エゴ・ドキュメントは「記念史」として再評価され、自叙伝等は資料として最適なものとされた[Dekker, R. 2002:22-28]。

もちろん、一人称での語りは、個人の体験や実践に基づく「主観的な記憶や感情」を書き留める行為であり、客観性に乏しいとの指摘もある。また、そこに「記録された事実」は「真実」なのかとの疑問も湧く。ただ、その点を長谷川は、「エゴ・ドキュメントは、語り手の視点から外側の世界をみる手段であり、記憶・感情・欲望・知識・意味などの主観性を考察するという利点をもつ。個人という主体の構築において、背後に複雑な社会的・歴史的過程が存在することを明らかにしてくれるのである」[長谷川2020：8] とエゴ・ドキュメントの歴史学における重要な役割を指摘している。

本章では、文人（日本人）の日記や回想録を手がかりに、当時の日本人が占領軍将兵の性暴力をどの様に捉えていたのか、また、占領軍慰安施設に慰安婦として勤めざるを得なかった女性たちや、慰安施設がオフリミッツ（off limits）となり街娼（パンパン）となった女性にどの様な視線を向けていたのかを探ることとする。

1. 高見順『敗戦日記』

高見順⁽¹⁾は、1941年から日記をつけ始め、病没する1965年まで続けている。生前には『敗戦日記』（文藝春秋新社、1959年）、『完本・高見順日記 昭和二十一年篇』（凡書房新社、1959年）を出版している。没後、『高見順日記 全8巻』（勁草書房、1964・1965年）が出版されている。高見は、永井荷風と共に「日記作家」とも称されている。また、ドナルド・キーンは、戦時中の文人の日記を分析した『日本人の戦争 作家の日記を読む』（文藝春秋、2009年）を出版し、高見順日記もその対象としている。

小説、詩作に定評のある作家であるが、膨大な日記を残したことで知られている。特に、1945年の日記は、『敗戦日記』[高見2005] として出版され、戦況の悪化、東京大空襲、庶民の暮らしぶりを活写している。

さて、終戦の4日後の1945年8月19日の日記では、占領軍の上陸により女性が危険に晒されるのではないかと流言があったことを伝えている。

「八月十九日

中村光夫君の話では、今朝、町内会長から呼び出しがあって、婦女子を大至急避難させるようにと言われたという。敵が上陸してきたら、危険だというわけである。

中央電話交換局などでは、女は危ないから故郷のある人はできるだけ早く帰る様にと上司がそう言っている由」[高見2005：323]

1945年8月29日の日記には、新田潤（小説家）と銀座のビアホールに行き、以下のことを話したと記されている。

「東京新聞にこんな広告（註＝特殊慰安施設協会の名で「職員事務員募集」の広告）が出ている。占領軍相手の『特殊慰安施設』なのだろう。今君（新田潤）の話では、接客婦千名を募ったところ四千名の応募者があって係員を『憤慨』させたという。今に路上で『ヘイ』とか『カム・オン』とかいう日本男女が出てくるだろう」[高見2005：340]

終戦の日から2週間しか経ていない時点で、市井では「特殊慰安施設協会」を話題にし、接客婦に応募した者が多かったことを同協会の係員が「憤慨」していたことが伝わっていることから、多くの日本人が占領軍特殊慰安施設の存在を知っていたと思われる。

1945年10月24日の日記では、高見の慰安施設で働く女性を蔑視する記述が見受けられる。

「大船で乗換。アメリカ兵と連れ立った日本の若い女が、相手を歩廊に残して一人車内に入った。（中略）車内の乗客の眼は、一斉にその女に注がれていた。軽蔑と憎悪の眼であった。私もその一人だった。（中略）私は次第に哀れを感じた。いわゆる特殊慰安施設の女らしく思われた」[高見2005：387]

当然、多くの国民はR.A.Aが、政府や警察組織が介在して設置されたことは知るはずもないし、巧みな勧誘で女性が集められた真相を知らないであろう。敗戦期の戦争離散による戦争孤児、また戦争で財産を消失し生活困窮が故に「慰安婦」になった女性は、「自ら好んで売春婦となった」と突き放し、蔑視することが当然なのであろうか。当時R.A.Aの情報宣伝係長であった橋本嘉夫は、いわば「騙して」勧誘したことを手記に残している。

「募集の看板をみて二十五歳くらいまでの女性が足を運んではきたが、おそらく若さを充分にもちこたえたと思われる者は、いなかった。ほとんど、みんなが、くたびれた様子であつ

た。だれもが怒っているような顔に見えた。腹が減っていると、人間は怒りっぽくなるなんていわれるが…。詮衡室で、慰安担当の幹部が、仕事の内容を説明するのだった。説明するというよりは、言い含めて念をおすのであろうか」〔橋本1958：37〕

橋本の手記からも、女性が「強いられた勧誘」、「経済的誘導」により慰安婦になったことは明らかであるが、「自己決定」したかのように装っているし、占領軍による性暴力の被害に遭わなかった多くの国民は、占領軍慰安婦と思しき女性を「蔑視、哀れみの対象」としていた。

ただ、高見は、占領軍慰安婦を哀れみの眼差しを向けながらも、国が率先してR.A.Aを設置したことには批判的な意見を持っていた。それは、1945年11月14日の日記からも見てとれる。

「松坂屋の横にOasis of Ginzaと書いた派手な大看板が出ている。下にR.A.Aとある。Recreation & Amusement Associationの略である。松坂屋の横の地下室に特殊慰安施設協会のキャバレーがあるのだ。（中略）日本人入るべからずのキャバレーが日本人自らの手によって作られたものであるということは、特記に値する。さらにその企画経営者が終戦前は『尊王攘夷』を唱えていた右翼結社であることも特記に値する。（中略）

日本軍は前線に淫売婦を必ず連れて行った。朝鮮の女は強いと言って、朝鮮の淫売婦が多かった。ほとんどだまして連れ出したようである。（中略）

戦争は終わった。しかしやはり『愛国』の名の下に、婦女子を駆り立てて進駐兵御用の淫売婦にしたてている。無垢の処女をだまして戦線へ連れ出し、淫売を強いたその残虐が、今日、形を変えて特殊慰安云々となっている」〔高見2005：426・427〕

高見は、辛辣な言葉を多用しR.A.Aや国を批判し、戦前の従軍慰安婦も「だまして連れ出したようである」と書きながら、彼女たちを「淫売」と罵っている姿勢は、高見は、母が「夜伽（よとぎ）」（戦前、政府高官や知事等が地方への視察の際に、寝床で男性の相手をする女性）を務め、その結果、当時福井県知事であった坂本杉之助の非嫡子として生まれ、私生児を理由にしばしば虐められたことが、慰安婦に対する複雑な気持を抱いた所以と見ることができる。

しかし、このような見方は高見に限ったことではなく、当時の市民が、明治憲法の下で天皇制を頂点とした臣民であり、また、女性は「婦女子」として一括され、男性が当然持つ権利を全く認められていなかったし、その中で慰安に従事する女性を「淫売」として女性自らが差別していた。当時の日本は家父長制の真只中にあり、女性を虐げることが社会問題だと認識できる状況にはなかったことから、知識人である高見さえ、平然と女性の人権を顧みることができなかったのである。

2. 大佛次郎『終戦日記』

大佛次郎⁽²⁾は、終戦前年1944年9月から翌1945年10月まで、太平洋戦争の戦中・戦後の状況

を小説家の目で、日記に克明に書き留めていた。

大佛は、19歳で明治維新を経験し、広い視野を持って活躍したいと考えていた、と言われている。親の強い希望で東京帝国大学に入学し、卒業後は鎌倉高等女学校の教師となり、1922年には外務省条約局嘱託として翻訳の仕事を行った。1926年には初の新聞小説『照る日くる日』を連載、翌年には東京日日新聞に『赤穂浪士』を連載し、当時の世相を元禄時代に重ね合わせ体制批判を行ったことが高く評価された。

終戦直後の東久邇宮内閣において「内閣参与」として招聘された。同内閣は1カ月半の短命であったため、大佛の内閣参与としての仕事も短期間で終わっている。

1945年9月3日の日記で、首相官邸に招致されたことを以下のように記している。

「九月三日

総理の宮の演説原稿の文章を書くのかと思ったら太田君に会うとそうではない。参内前でいそがしい時間を宮の部屋へ何うと『この度内閣参与になって貰う。しっかり頼みます』と上をむいて笑いながら云われ、こちらはお辞儀をして退室してきた。同列の児玉誉士夫というのと別室で話す」[大佛2007:355]

また、同年9月9日の知人山本泰明に宛てた手紙では、内閣参与になったことを報告し（その時点では新聞報道もされていなかった）、その役職を揶揄したとも取れる記述も残している。

「まだ新聞に出ないなでよかったのですが、総理大臣の宮さまに呼びだされて内閣参与ということに成りました。妙なことに成ったと思うのですが、一生けんめい智慧をしぼって働くつもりです。（中略）宮さまのお側に附いているのですから、行儀よくしないとイケないでしょう」[大佛2007:401]

大佛は、戦前の一時期外務省職員として翻訳の仕事をしていたし、1942年に大政翼賛会の支部「鎌倉文化聯盟」が結成されたのに伴い、同聯盟文学部長に就任している。当時が戦時体制であったことを勘案すると、大佛も御多分に洩れず一市民として戦争に協力していたと考えられるし、その意味では当時の国民の代弁者ともいえる。

その大佛は、幾度となく占領軍の情報と女性の動向も日記に残している。しかし、日本の家父長制度において女性の人権がほぼ蔑ろになされていたことには言及せず、軍による性暴力のみを殊更に記述している。自らの女性蔑視の心情には気がついていないといえる。一方で、高見は自らの女性を蔑視・差別していることに素直に向かい合っていたともいえる。

大佛は、終戦の翌日の1945年8月16日に、来訪者から占領軍の上陸に伴い女性子どもを避難すべき、とのデマが広がっていることを記述している。

「八月十六日

夜おそく村田来たり医師が診察に来ての話に、米軍は明日あたり上陸（それも鎌倉に）するらしく女子供を避難させる要ありと話して帰るがと意見を問われる。工場に来ている巡査もデマがとめどもなく飛び処置なしと語りし由」[大佛2007：326]

ごく普通の国民が、占領軍による女性への性的暴行を危惧しているが、これはさまざまな文献からも日本が戦時中に中国や朝鮮半島で行ってきた「残虐行為」が、米軍を中心とする占領軍も当然行うだろうとの「憶測」が働いたことによるといえる。

大佛は、その点に関して次のように記述している。

「八月二十日

吉野君の話で材木座あたりでは米軍が小さい子供を軍用犬の餌にするとても恐怖している母親が多いという。無智と云うのではなくやり切れぬことである。敵占領軍の残虐性については軍人から出ている話が多い。自分らが支那でやったことを思い周章しているわけである」[大佛2007：341]

また、1945年8月30日の日記では、占領軍の慰安施設に直接触れている。

「八月三十日

横須賀の料亭待合芸者屋に廃業禁止の命令が出ている。米軍の慰安所に向けられる用意である」[大佛2007：352]

先述したが、大佛が1945年9月3日の日記に東久邇宮よる「内閣参与」任官への挨拶に行っていることから、既に8月末時点で、国や政府の動静を知る立場にあったと思われる。従って、横須賀の料亭が「米軍の慰安所に向けられる用意」と記載されていても不思議ではない。また、この点は、新聞等によるR.A.Aの広告を見てもわかるように、広く一般市民にも知られていたと推察できる。

また、同年10月7日の日記では、横浜に赴き、伊勢崎町の旧遊廓の状況を見て回ったことを詳細に記述している。

「十月七日

佐藤栄七氏の案内で横浜のその後を見に行く。（中略）上大岡で降り田圃の中の花街をのぞく。戦争中寮になっていたのを県の命令で急に店を開け焼けた日本橋あたりの芸者（？）が入る。押すな押すなの盛況だそうだが日中のせいかわりにひそりとしている。花月と云う家。米兵が玄関で二人待っている。上ってビールをのむ。（日本人は立ち入り許さぬ。）襖一

重向こうに米兵二人おりやがてパーマメントにスフの和服で真白に塗ったのが入る。言葉は通じぬが結構意志は通じるらしい様子である。もと十円持って来ると飲んで泊まったのがショートタイムで七十円と云うきめだそうである」[大佛2007: 371]

大佛の日記は、占領軍慰安施設の盛況ぶりを記録しているが、その点は、2章で引用した『神奈川県警察史 下巻』の記述とも付合する。大佛が日記に認めた「上大岡で降り田圃の中の花街」とは「真金町遊廓」のことで、元々大川町にあった「大久保遊廓」を1922（大正11）年に真金町へ移転したものであった。その後正式に三業地⁽³⁾として指定され、1935（昭和10）年には、芸妓置屋、料亭、待合が30軒を超え大いに振ったが、花街は戦局の悪化に伴って営業停止となった。敗戦後は占領軍用の「慰安施設」に転用されたことで賑わいを取り戻し、1958年の売春防止法施行により一気に廃れた。

大佛の十月七日の日記では、真金町遊廓及びその周辺で、占領軍将兵が日本人女性と性行為に興じる状況が辛辣に描かれている。

「米国人の方が日本人の客より親切だというのが女たちの見つけた定説らしい。花柳病者が出ると一せいに来なくなるそうである。バラック住いの下流の女房娘たち高商に入っている部隊になれ醜行さかんだそうで南区長が嘆じる。あの辺の草原はサックだらけですよと云う言葉で表現する」[大佛2007: 371・372]

大佛の日記は客観表現が多く、通常の日記のように自らの感情を彷彿とさせる文章が少ない。これは、後世に読まれることを意識して書かれたものと思われる。占領軍慰安婦や売春をせざるを得ない女性への眼差しも、社会的誘引としての貧困、離散、浮浪問題に向けられるのではなく、傍観者然としている。当時の文人も、その時々社会情勢や文化には抗えなかったということなのだろうか。

高見、大佛に共通するのは、戦中に日本軍が行った残虐的行為を、占領軍は十分承知して、勝者として同じことを行なっているとの分析は、「敗者は、勝者に陵辱されて当然」との世界共通の不文律があったのだろうか。ただ、その事実に対して個人的見解を述べるでもなく、横須賀での慰安施設の繁盛ぶりを冷静に記述しているのは、傍観者然としている大佛らしさなのかもしれない。

3. 山田風太郎『戦中派不戦日記』

山田風太郎⁽⁴⁾は、探偵小説家で、代表作に『甲賀忍法帖』、『魔界転生』などがある。戦中・終戦時は東京医科大学の医学生であった。

山田は、100冊を超える小説を世に送っている。数は少ないがノンフィクションも得意としていた。太平洋戦争の戦況が厳しくなった1942年から日記をつけ始め、後に1942～1944年までの

日記を『滅失への青春 戦中派虫けら日記』（1973年、大和書房）、1945年の日記を『戦中派不戦日記』（1985年、講談社）として出版。山田の没後には、小学館より、1952年までの日記が随時刊行された。

「一 私の見た『昭和二十年』の記録である。

いうまでもなく日本歴史上、これほど — 物理的にも — 日本人の多量の血と涙が流された一年間はなかったであろう。そして敗北につづく凄じい百八十度転回 — すなわち、これほど恐るべきドラマチックな一年間はなかったであろう。

ただ私はそのドラマの中の通行人であった。当時私は満二十三歳の医学生であって、最も『死にどき』の年代にありながら戦争にさえ参加しなかった。『戦中派不戦日記』と題したのはそのためだ。ただし『戦中派』と言っても、むしろ私一人のことである」[山田2002：3]

山田は「戦争にさえ参加しなかった」と、自分の意思で「不戦」を貫いたかのように記しているが、1944年2月に召集令状を受け取り徴兵検査を受けたが、肋膜炎のため「丙種」とされ、当時、甲種及び乙種合格者のみだけが徴兵され、山田は徴兵不合格となり入隊を免れていたからであり、自分の意思で「徴兵忌避」し不戦を貫いたのではなかった。

この点や、家族との関係に一生悩み、孤独であったのかもしれない。ただ、このような状況であったがゆえに、日本が戦争へ暴走する姿と敗戦後の極端なまでの方向転換を、客観的に見て批評できたのであろう。

終戦から3日後の1945年8月18日の日記では、横浜に30万人の米兵が上陸するとの噂を聞いたと記し、近所の大洋製作の「おやじ（経営者）」を訪ねて、その彼が語ったことを克明に記している。総文字数で5000字を超えており、当時の一般市民の感情を正確に伝える貴重な証言である。

「女がこまるって？ミサオを汚されるってのか？そりゃそうだな。アメリカ兵ったら、イギリスへいってその道じゃあばれちらしたんだからな。まして負けた日本に来るんだ。うん、そりゃ上陸して船から下りるときに、もうそのことばかりかんがえてるにきまっている。（中略）

今の日本の淫売どもといったら、何百万いるか知れやしねえ。（中略）うちの職人でも、養いもなんもできねいようなのらくらに、三人も四人もひっついて追っかけ回してるんだから。…米一升ならどうにでもなる、なんてのはザラにあらあ。なにしろ日本の女あいま余っているだからな。

けんどおほこは勿論いけねえ。アメリカ兵のおもちゃにさせられるのは勿体ねえ。芸者、女郎、女給なんてえのは、工場なんかに動員されたってんで駄目だったが、こっちなら本職だ。日本の女あその道にかけちゃ、ちょっと世界に類がねえほどうめえっていうぜ。

それにあいつらだったら、アメリカ人ってきいたら、いっそううれしがって、首ったまに

飛びつくにきまってる。満天下に募集してみろ、たちどころに何十万と集まらあ。なにしろ、飢えて飢えて、足をばたばたさせてるのが多いんだから。何とか特攻隊とでも名づけるかね？へっへっ。

日本の処女の防波堤？国体の護持？御冗談でしょう。あいつらに国体もシャケの頭もあるもんか。またそれでいいんだ。うれしがって、毛唐の鼻毛を数えてりゃあ、それがお国のためになるっていうもんだ」[山田2002：438・439]

「おやじ」は、売春に従事する女性を「淫売」と罵り、「女あいま余っているんだから」と、アメリカ兵に差し出し、「それが御国のためになる」と断言している。その言葉の端々には、日頃は性のはけ口として遊廓を利用しておきながら、彼女たちを蔑視することを厭わない姿は、当時の男性の一般的な感覚（女性も含めて一般的だったのかも知れない）だと見てとれる。

この日の日記は、大洋製作の「おやじ」が語ったことを、「」書で示し、山田の感想は全く記されていない。市井に生きる人々を、客観的に分析するために、山田は「アウトサイダー」に徹したのであろうか。

1945年9月9日の日記では、当日の新聞記事を受けて以下の感想を述べている。

「娘を捕まえてキスをする者。軍人と見れば襲いかかりて軍刀を奪うも者。これ米兵なればやむなし。されどこちらよりして県庁にて米兵用のダンサーを募集したり、或いは自ら戦争犯罪者を裁くべしなど叫んだり — まさに醜態の極みならずや」[山田2002：485]

この日の日記の「県庁」とは、当時山田が在学していた東京医科専門学校（後の東京医科大学）が、戦況が厳しくなる中で1945年から戦後しばらく長野県飯田市に校舎ごと疎開していたことから、「長野県」を指していることが分かる。

この記述から、長野県も、東京都や他県と同じく警察組織や公的機関が介在して慰安婦を募集していたことが見てとれる。公的機関が占領軍用のダンサー等を募集している様を山田は、「醜態の極み」と批判的に捉えている。

9月以降の日記では、アメリカ将兵に関する記述が多くなってくる。

9月19日の日記には、横浜から帰ってきた友人安西の見聞を残している。

「九月十九日（アメリカ兵は）ジープに乗って走っていて、女がいると騒ぐ、手を振る。ふつうの女は真っ蒼になって逃げるが、花柳界の女たちはもう手をつないで本牧あたりを歩いている」[山田2002：509]

山田は、女性を「ふつうの女」と「花柳界の女」と区別して使用している。その根底には、根強い女性蔑視の思想がうかがえる。

「九月二十日 暴行を働かれた日本の女が、敵の屯営でいかなる損害賠償を望むかときかれ、洋服一着を所望したという」[山田2002：512]

「十月二十二日 伊勢丹の所の十字路で、アメリカ兵が通行中の日本娘二人をジープの中に抱き入れて、膝に抱っこして飛んでいってしまった。悲鳴をあげるどころか、娘たちは顔を真っ赤にして、しかし眼はかがやいて笑っていた」[山田2002：573・574]

「十月二十八日 新宿につき、病院にいったがまだ蒲団にはついていない。（中略）病院前の往来を、日本娘をのせたアメリカ兵のジープが矢のように走っていった。（中略）

二人の日本娘を従えたアメリカ兵が散歩している。みな慔然としてそのあとを見送り、『これからは女の方がいいかも知れないな』」[山田2002：596]

「十一月二十八日 四時ころ劇場を出て、日比谷公園に入って見る。（中略）噂の通り、なるほど進駐軍がいたところ日本娘の頸や腰に手を巻いて座っていたり歩いていたりする。中には向かい合ってブランコにのっている組もある。

日本人は首さしのぼし、この風景を見るがごとく見ざるがごとく歩いている。ベンチの端では老人がほそほそと芋をかじっているのに、反対の端では抱き合って、チューチューナンナンとやっている」[山田2002：633]

「十二月一日（習志野を通るバスの中で女性と会話している老人の話）『とにかく負けたてことはみじめなもんですな』

『でも、案外大したことなかったじゃありませんか。何しろ政府の宣伝がひどかったですものね。男という男はみんな殺される。女はみんな黒ん坊の人身御供になるなんて』

『ほんとアメリカの兵隊なんて親切ですねえ。あたしにも年ごろの娘がいてずいぶん心配したものですけど、今じゃ進駐軍のクラブに勤めています。何でもないわなんて笑っていますよ』」[山田2002：639]

「船橋への遊廓、今や日本人など相手にしないそうで、近隣の若い男は悲鳴をあげているそうである。向うの方（アメリカ兵）が気前がよくて、煙草やチョコレートをくれて、あっさりしているからだそうである」[山田2002：640]

「十二月九日（東京駅）駅前の広場にも進駐軍が歩きまわっている。たいいてい日本の娘を連れている。ビルのあちこちには昼三疊分くらいでありそうな星条旗が碧空に翻っている」[山田2002：655]

終戦数ヶ月足らずで、占領軍兵士と日本人女性の交流が増えていたことが山田の日記から読み取れる。11月28日の日記では、山田は日比谷公園での占領軍将兵と日本人女性のデート風景を活写しているが、このような光景が日常化していたことは、2章で引用したアメリカのフォト雑誌“LIFE” 1945年12月3日号の記事とも付合する。

山田は、当時の世相や戦争に鋭い目を向けているが、多分に彼自身の生育歴が影響を与えている。生家は代々医業を営み、父も兵庫県養父郡関宮村（現養父市）で開業していた。5歳（1927年）で父を亡くし、その後、母は父の弟（叔父）と再婚。旧制中学2年（14歳、1936年）には、母も亡くなり叔父は別の女性と再婚をしたことから、叔父との関係は破綻した。1942年20歳で徴兵検査を受けたが、丙種となり入隊を免れた。そのことから、山田の日記には「戦争にさえ参加しなかった」と綴られている。

その直後家出同然で上京し、沖電気軍需工業（品川区）で働きながら医学校を目指し、22歳（1944年）で東京医学専門学校（現東京医科大学）に入学し医師を目指した。

山田のアウトサイダー的視点は、幼少期の両親の死亡、家族不和、多感な青年期の戦争、徴兵検査での不適格（丙種合格）が、その形成に大きな影響を与えたと考えられるし、「社会からの疎外や劣等感」が、山田の思想を形成したと思われる。

山田は、占領軍将兵の行動そのものには、卑屈なまでも批判的には記述していないにも関わらず、女性、特に占領軍将兵に媚を売る女性や慰安婦には手厳しい批判を浴びせている。しかし、そこには「傍観者」⁽⁵⁾を自認しておきながら、女性蔑視・差別感情が身に染みた時代に生きた、あるいは教育を受けた者の限界が垣間見える。

山田は、女性を「穢れた者」と見ていたのかも知れないが、そこには身を売る女性の真相に迫るだけの想像力が欠如していたのかも知れない。戦後においても、従軍慰安婦問題では、日本政府は「発見した資料の中には、軍や官憲によるいわゆる強制連行を直接示すような記述は見当たりません」[外務省1993]と「強制性」を一貫して否定している。しかし、これも、「想像力の欠如」を露呈している。いかにも、自分の意思ではなく「強制」されたことのみが問題である様に、問題を矮小化、あるいはすり替えている。戦後の売買春も「強制」なのか「自己決定」なのかを問えば、誰かに強制されたのではなく自らの意思で「売春」を行なっているとして、その問題・課題を正視してこなかった。筆者は、売春をせざるを得ない「社会的誘導」と、買う側の買春してしまう「社会的誘導」にこそ、今日社会の構造的矛盾が潜んでいると考える。

社会的誘導とは、貧困・格差・差別・あらゆる物の商品化から由来するものであり、一見強制はされていないが「売春しないと生きてはいけない」現実へ誘導してしまう事象である。しかし、誘導は顕在化せず、自由意志で売春をしているように見えてしまい、様々な公的支援は自らが助けを求めない限りは全く得られない。顕在化しにくい「社会的誘導」にこそ目を向けるべきではなかろうか。

4. 徳川夢声『夢声戦争日記』

徳川夢声⁽⁶⁾は、島根県益田市生まれで東京に育ち、東京府立第一中学校（現在に都立日比谷高校）を卒業後、1943年に活動写真の弁士となった。文才があり、小説、エッセーも多数執筆している。また、生涯に渡り詳細な日記をつけており、特に1941年から1945年までの日記は、『夢声戦争日記（全五巻）』として1970年に中央公論社から出版されている。その後、1977年には、文庫版『無声戦争日記（全七巻）』が中央公論社より出版されている。また、同日記は、当時の世相を知る貴重な史料とされている。

1945年8月22日、夢声は、娘（無声には三人の娘がいる。その一人、「高子」）が会社で渡された「日本の娘たちに与える注意」のガリ版刷を読み、感想を実直に記している。

「八月二十二日

何箇条かの文章いづれも日本ムスメがヤンキーに弄ばれざるよう、部屋に這入つたら背後の扉を開けておけたの、一人操縦の自動車に乗せて貰うなどの、物を貰ってはいけないだの、の類なり。

第一次世界大戦後、ドイツの某地に、仏蘭西黒人部隊駐屯して、その地に黒白の混血児数十万生れた、という話を吾が娘たちに聴かせ、父親として釘をさしておく。

教養低きヤンキー兵ども、舌なめずりしつつ、日本ムスメをモノにせんと、張り切りで来るのかと思うと、甚だ屈辱を感じる。

ところで、女性の1つの特性として、異人種に興味を持つもの。この注意書を読見て、彼女たちは恐らく、フンガイと好奇心とを半々に感ずるならん。（中略）

なんにしても、娘の父親たるものは、この際、妙てけれんな圧迫を感じるなり。

ヤンキー相手の悲劇と喜劇、これより日本本土に充満するならん。

敗戦国の父親のみ、冷然として吾れは迎えばや」〔徳川1960：169・170〕

夢声は、3人の娘を持つ親として、占領軍将兵を「教養低きヤンキー」〔徳川夢声1960：197〕と罵り、女性が陵辱されることを心配している様が窺える。しかし、日本軍が占領地で行った性暴力を、戦後占領軍が同様のことを行うことに「これが戦争の論理」〔徳川1960：197〕と一定の理解を示している。これは、戦中には政府の政策を無批判的に信じた夢声が、終戦間もない頃も、未だ日本政府の呪縛から解き放たれていなかったことの証であろう。

「九月五日

敗戦国民が、味わねばならない、定食のこんだてには、女子陵辱がつきものだ。既にボツボツと怪しからぬ噂を聴く。年ごろの娘を三人抱え、老いたりとは言え女には相違ない妻を有する私としては、平気でいられない問題である。アワヤという場面を、チラと想像するだけで、忽ち不愉快になって了う。（中略）

米兵の暴行と聴いて、私はヤンキーの思い上がった振舞をのみ想像に描いていたが、— 無教養ヤンキー、ギャング上り、ルンペン上り、人足上り、百姓上り、下級労働者上り、などの兵隊が、酔っ払って暴れるぐらいに考えていたが、— 今日聴くと、ニグロとフィリッピン
の暴行が一番始末が悪いという。

こいつ等は、この女と見当をつけると、身体をはるから叶わない、と漫才の千太君が言う。
なるほど、そいつは実に叶わない。

『日本軍のやったことを、俺たちもやるんだい、文句はあるまい』

なるほど、一理あるような、ないような。これが戦争の論理なのであろう。(中略)

さて、この夜のこと、上野原から帰った富士子（夢声の娘）の報告、— 八王子から吉祥寺
まで列車が駅で止らず、妙な半端な所で止まった、ヤン兵が発砲するかもしれないという訳
だそうだ、— 八王子駅で、印度人の兵隊が窓から手を入れ、富士子の身体を撫でた、と言う」
[徳川1960：197]

「九月二十八日

醜女のバカ化粧は実に見ていて腹のたつものなり。(中略)

今日もこの種の女二人連れなるを、駅の歩廊にて見かけたが、想うに彼女らは、アメリ
カの兵に、目をつけらるを期待せるものなるべし。国辱を型にして現わさば、斯くの如くあ
らん。醜女に生まれついたるが気の毒とは、毛頭思わず。(中略)

彼女たちこそ、殊勲申に価する勇者なりと言うべきか？」[徳川1960：228]

9月5日、28日の日記では、性暴力に関して、「日本軍もやったこと」を彼らも行なっている
だけとして否定も肯定もしていないが、「これが戦争の論理」として諦めている姿が見えてくる。
また、醜女（ここでは、娼妓や売春婦を意味している）が米兵に媚を売っているように振る舞う
ことが、女性たちを性暴力の被害から救ってくれていると「彼女たちこそ、殊勲申に価する勇者
なり」とし褒め称えている。当時の教養人とされた夢声ですら、娼妓や売春を行う女性を、女性
一般と区別し彼女たちに性の防波堤としてその責任を負わすことに何の躊躇もなく日記に書き残
していることから、当時の教養人、いわんや一般市民が、女性の人権に極めて無頓着であったこ
とが推察できる。

さて、福島劇場で興行2日目の1945年10月7日では、無声は近くのキャバレーに飲みに出る。
そこで、アメリカ軍士官一向に遭遇し、「このキャバレーで見た、アメリカの士官たちに、すっ
かり感服してしまった」[徳川1960：239]と一種興奮して語っている。

「十月七日

彼らが一向に勝った顔を見せていないことだ。少しも勝利者の威厳を誇示するという様子
がない。(中略) 征服者の士官が、被征服者のダンサーに対して、甚だインギンをきわめる。

女の臀が椅子に納まるまで、自分は起っていて、その椅子をボーイの如く動かしてサービスする。それから、自分が便所に立つ時は、必ずダンサーのその趣きを断つてから行く」〔徳川1960：239〕

この日の日記の最後に、「こうした彼等の遊びぶりを見て、つくづく自分たちの野蛮性を、私は感じさせられたのである。なるほど、戦争に敗けたのはアタリマエという気がしたのである」〔徳川1960：240〕との感想を記している。

しかし、1960年に本日記を出版する際には、わざわざ注を入れている。

「注、彼等は歴戦の勇士であったから、格の如く紳士であったのだ。アメリカ兵にもピンからキリまでであることは、後に到って私は知らされたのである」〔徳川1960：240・241〕

夢声は福島劇場興行の折は、米兵を紳士と評していたが、結局「ピンからキリまでである」とし評価を変えている。ここにも、男性中心社会のご都合主義が見え隠れしている。

5. 回想録から見えてくる終戦と女性観

1) 吉村昭『東京の戦争』

吉村昭⁽⁷⁾は1927年東京日暮里生まれで、生家は、布団寝具を製造する工場や紡績工場を営み、寝具店や鉾山に卸す裕福な家庭であった。前年の1944年には母が子宮癌で死亡、父も終戦の年（1945年）12月に癌で亡くなる。終戦時旧制中学最終年で、父母の死亡を受けて将来の就職を考え進路に悩んでいた時期である。

1958年『青い骨』を自費出版し作家としての道を歩む。その後、1959年に発表した『鉄橋』は第40回芥川賞候補となっており、作家活動中1966年『星への旅』で太宰治賞を受賞。1973年には、『戦艦武蔵』、『関東大震災』により菊池寛賞を受賞した。これ以後、記録文学に新境地を拓き、証言、史料を駆使し、精緻な記録文学・歴史文学を執筆している。

ここで取り上げるのは、吉村の回想録『東京の戦争』で、初出は、文芸誌『ちくま』2000年7号から2001年9号まで連載されたエッセイを2001年7月に単行本として再構成したものである。執筆当時、終戦から55年が経過しており、終戦時の記録はその後の膨大な情報や最新の研究成果の吸収等によって書き換えられている可能性は否定できない。しかし、長い年月の中で、自らの体験を経験化していく作業の中で、高度に客観化・抽象化され、読み手にとっては筆者の経験を俯瞰的に読み解くことが可能である。

吉村の青春時代は、戦中戦後の真只中で、空襲、米戦闘機、親の死、進駐軍との遭遇などを淡々と綴っている。

吉村は、「進駐軍」の章では、他の章とは打って変わって感情を露わにしている。終戦間もない頃の情景を綴り、米兵が投げたチョコレートを拾う子どもに混じり大人が拾っている姿を「情

無かった」と批判的に見ている。

「或る日、私は、思いがけぬ情景を眼にした。

停車した軍用トラックから、米兵たちが笑いながらチョコレートやキャンディを投げている。道に落ちたそれらを子供たちが争うように拾っていたが、驚いたことに初老の男も子供に混じって拾っている。

（中略）無心な子供が拾うのは仕方ないとしても、大の男が拾う姿は情無かった。たとえ国破れたりとは言え、敵として戦っていた米兵のばら撒くものを手にすべきではない、と思った。

私は、物悲しい気持ちになり、そうそうにその場をはなれた」〔吉村2001：164・165〕

吉村は幼少期から青年期まで、布団綿製造工場、綿糸紡績工場を経営する家庭に生まれ裕福であったことから、当時の一般的な庶民のように食うに困っていたとは考えられないが、生きるためには敵国米兵がばら撒くチョコレートであっても拾わざるえない大人に「容赦ない眼」を向けている。彼の偏見は、時として女性たちへも向けられている。

米兵の健康な体躯を「臀部の豊かさに、かれらが栄養価の高い食物を日常ふんだんに摂取しているのを感じた」〔吉村2001：166〕と感嘆し、その対比として、「若い日本の女」を批判的に描写している。

「不快なのは、かれらと手をにぎり合って歩いている若い日本の女たちだった。

原色に近い色の派手な服を着、濃厚な化粧をして嬉々として兵たちにすがりついて歩いている。露地で大きな兵に抱きかかえられ、ハイヒールの爪先を立ててキスされている女もいた。肩をかかえられてジープに兵たちと笑い声をあげながら乗っている女もいたし、電車の進駐軍専用車に誇らしげに乗っている女もいた。

彼女たちはバンバンと俗称された街娼で、一人の将兵に独占される部屋をあてがわれていた女は、オンリーと称されていた。彼女たちは将兵から衣服、食料品をもらっていて、豊かそうであった。

或る日、銀座で若い兵と手を握り合って歩いている若い女を見た時は、強い衝撃を受けた。それは、街娼とは異なった良家の子女らしい服装と化粧をした美しい娘だった」〔吉村2001：166・167〕

吉村は、日本政府や警察組織が関わり占領軍用の慰安施設を作っていたことを知っていたのであろうか。また、各地での慰安施設で性病が拡大したことで、占領軍が将兵の慰安施設への立ち入りを禁止（オフリミッツ）とし、やがて売春防止法施行されたことで、基地周辺で娼妓の街娼化が進んだのであった。吉村が見た女性たちは、自らの意志でバンバンになったのであろうか。

「性の防波堤」として、多くの女性を慰安婦として募ったことを、強制性はなく、女性は自己の意志（自己決定）で慰安婦や売春婦となったと結論つけられるのであろうか。

吉村は、「進駐軍の兵とともにいる女に同じ日本人として苛立ちと腹立たしさを感じた。少し前までは敵国人であった進駐軍の兵に肉体を売る女たちが許しがたく、卑怯にも思えた」〔吉村2001：167〕と、極めて否定的、差別的な表現で彼女たちを非難している。吉村の「肉体を売る女」を見る目と、「良家の子女」への視線は、かなりの相違がある。同書が執筆されたのが戦後55年を経た2000年であるにも関わらず、日本における女性観や女性の地位が先進国に比べ遅れたままの状態であったことを物語っている。

2) 小林信彦『一少年の観た〈聖戦〉』

小林信彦⁽⁸⁾は、江戸時代から続く東京両国の老舗和菓子屋「立花屋」の長男として1932年に生まれ何不自由なく育ったが、1945年3月の東京大空襲で実家が焼失、進学した東京高等師範学校附属中学校（現筑波大学附属中学校・高等学校）も空襲で焼失し、新潟県に疎開。終戦後1946年12月に東京に戻り復学した。

進学した早稲田大学では英文学を専攻したが、父の死亡と、実家の土地が騙し取られる等の不幸も重なり生活は困窮した。卒業を前にマスコミ分野への就職を希望したが当時の就職難の中で失敗し、叔父の経営する塗料会社へ就職した。その後、職を転々とし、1958年出版社「宝石社」の顧問として採用された。同社では、1959年創刊のミステリーマガジン『ヒッチコックマガジン』の編集長となる。この頃より小説を書く様になる。

『一少年の観た〈聖戦〉』〔小林1995〕では、1940年から憲法公布の1947年までの状況をまとめた随想である。埼玉県飯能、新潟での疎開生活、戦後の闇市、少年時代の体験も織り交ぜながら当時の生活を描き、率直な感想を綴っている。

同書の「日本が崩れる日」の章では、当時、占領軍兵士による女性への強姦を恐れていたことを吐露している。ただ、そこには新聞社への不審も覗かせている。

「あくる（8月）二十一日の新聞は、〈有難い御仁慈の灯 明るくなった帝都 たゞ再建に必死のご奉公〉という見出しで、国民の〈ひたすらの御奉公〉を強調している。戦争に負けたことへの言及、それまでの虚偽の報道への反省は、一行たりともない。

八月十五日を過ぎても、「朝日新聞」は〈敵兵〉という表現をやめず、〈女子は隙なき服装を〉と呼びかけている。強姦されるぞ、と、ほのめかしているのだ。

（中略）

戦争は終わったというが、要するに、負けたことは、みんな知っている。

とすれば、常識であった〈男はペニスちょん斬りで奴隷、女は強姦〉の線はまだあると、ぼくはみていた」〔小林1995：165〕

小林は、その後R.A.Aが設置され、多くの女性が占領軍兵士の性的慰安に供されたことに関しては記述していないが、当時「女は強姦」と表現するように、戦争下では常に女性が陵辱されることを認識していたし、小林の「常識」との表現からそれが当然視されていたのであろう。

また、小林は、1995年に『一少年の見た〈聖戦〉』を出版し、戦前は日本の侵略戦争を実質的に黙認し虚偽の報道をしてきた「新聞」が、戦後「反省」をしていないことの怒りを露わにしている記述を残しているが、終戦当時13歳の小林少年が早熟だとしても、当時の小林の感情と捉えるのには無理がある。雑誌社での長年の編集経験で、幅広い知識を得て、終戦から50年を経た1995年当時の小林の感情と捉えるのが正しいと思われる。

3) 小関智弘『東京大森海岸僕の戦争』

小関智弘⁽⁹⁾は、1933年東京生まれで、東京都立大学附属工業高を卒業後、18歳から大森の町工場で旋盤工として51年間勤務。旋盤工の傍ら1960年代から同人誌等に小説を発表。1977年『錆色の街』で直木賞候補、1979年『羽田浦地図』で芥川賞候補となる。1981年『大森界限職人往来』で日本ノンフィクション賞を受賞している。

小関は、随想や小説に、度々大森界限を登場させている。大森は、R.A.Aが最初の占領軍慰安施設を設置した場所であり、1944年には捕虜収容所（平和島）が設置されたところであった。この頃の事は、小関少年の中にも鮮明な記録として残っていたようだ。

「そのわずか（注：終戦を迎えた1945年8月15日から）十数日の間に、平和島とは目と鼻の先、たぶん収容所からは直線距離にすれば百メートル前後の、運河を挟んで向かいあう陸側で、驚くべきことが計画され、実行された。日本の善良なる婦女子の純潔を守るための新しい防波堤がつくられたのである。

木崎と第一京浜国道（国道十五号線）が交差するあたりから品川方面に向かって鈴が森交差点にかけて、かつて国道の海側にずらっと高級料亭が並んでいた。

たまたまそこを車で通った皇族のひとりが『あれは何の宮のお邸か』とたずねたというエピソードが残るほどの建物であった。平和島が出現する前、料亭の裏庭は海に面して眺めがよく、そこで近海でとれる江戸前の魚が名物料理であった。

その一郭に防波堤はつくられた。まず最初が小町園、続いて悟空林という料亭である。防波堤の名前はRAA（特殊慰安協会）という」[小関2005：174]

「八月二十七日、慰安施設第一号として、進駐軍上陸コースにある京浜国道に面した、大森小町園が開設され、まず五十人の女性たちが送り込まれた。急造の突貫工事で、十畳、二十畳の大部屋をカーテンや屏風で仕切り、三十余りの割り部屋ができあがった」[小関2005：178]

そこで繰り広げられたのは占領軍将兵に性的慰安を提供することであつが、終戦当時13歳であった小関少年は、詳しいことは理解していなかった。しかし、この点に関して以下の様に記している。

「筆舌に尽くし難いことが、その大きな料亭で進行しているとは露知らず、わたしたち少年は、上陸用船艇で横浜に上陸したという米兵たちがジープを止めて、なにやら陽気にはしゃいでいる様子を見物していた」[小関2005：179・180]

自責の念を込めて語る小関は、さらに、R.A.Aの原型が、戦中の日本の占領地や国内での慰安施設にあると述べている。

「戦地だけではない。戦争中の内地でも行われていた。しかも同じ大田区の、いまは羽田空港の敷地に埋もれた旧蒲田区穴守町でのことである。（中略）戦争が激化した昭和十九年に、江東区洲崎（明治以来の遊郭のあることで知られる）の業者が入りこんで、ここにその名も同じ特別慰安所をつくった」[小関2005：180・181]

1944年2月25日には、政府は「決戦非常措置要綱」を閣議決定し、学徒動員体制、国民勤労体制を徹底した。要綱では、「家庭ノ根軸タル者ヲ除ク女子ノ女子挺身隊強制加入ノ途ヲ拓キ且之ニ即応シテ官庁側ノ指導、斡旋、保護ノ充実ニ遺憾ナカラシム。右ニ関連シ速ニ動員機構ヲ整備シ特ニ軍動員トノ関係ノ緊密化ヲ図ル」とし、当時女学生だけではなく、娼妓、芸妓も「女子挺身隊」に組織され、軍需工場等で働かされた。

小関によると、「昭和二十年六月。穴守の慰安施設特別許可なる。穴守町750番地付近六五〇〇坪を、産業戦士に対する慰安施設として臨時私娼黙認地域を認可」[小関2005：181]とある。産業戦士とは、軍需工場で働く労働者一般である。

「昨日、お国のためだと言われて軍需工場で慣れない手つきで通信機の組立てをやらされた彼女たちが、明日はやはりお国のために、産業戦士たちのために体を開かされた。戦争は常に弱いものを犠牲にする。RAA第一号として、京浜国道沿いの小町園が開業するわずか三ヶ月前、そこからわずか四キロほどしか離れていない羽田穴守町に、RAAの原型が存在していた」[小関2005：182]

下町大森に長らく旋盤工として働き、戦中、戦後を生きてきた小関は、あくまでもそこに暮らす住民の目線で素直に記述している。小関は、国や警察が直接関わり設置した特殊慰安施設や慰安婦問題を真摯に受け止め、私見を吐露している。

「第二次大戦の敗戦国ドイツやイタリアでも、同様の女性たちが存在した。ただ小町園や悟空林に集められた女性たちは、園長がいみじくも言ったように『国策』によって集められたという点でのみ、違っていた。その恥知らずな国策を取った国は世界でも日本だけである」
[小関2005：187]

上記の小関の指摘は、必ずしも正確ではない。2章でも触れたように、終戦当時東京都民政局予防係長与謝野光、同東京都障害部長磯村英一は、共に慰安施設設置に関しては占領軍からの要請があったことを認めている。

先に引用した小関の文章の中に、「園長がいみじくも言ったように『国策』によって集められた」とあるが、真壁昊「生贄にされた七万人の娘たち」[真壁1978：214]には、小町園の所長であった高松八百吉の話として記述がある。これは、1946年3月27日、占領軍が慰安施設での性病蔓延を理由としてR.A.Aの慰安施設をオフリミット（出入り禁止）にした時に、高松が慰安婦に語った話である。

「今日限りただいまからすぐ、RAA関係の慰安所は一際オフ・リミット（ママ）になったから、諸君は適当に職を探してもらいたい。…協会は営利事業ではなく、国策的な仕事であった関係上、ほとんど利潤は上がっていない…せめてお国のために尽くしたという、ただ一つの誇りを土産として、慰めとしてお別れしていただきたい」[真壁1978：214]

筆者が対象とした小関の『東京大森海岸 ほく戦争』は2005年に出版されて、既に戦後60年を経ての執筆であり、小関の記憶だけで書かれたものとはいえない。また、終戦当時12歳の少年であったことを考えると、当時の状況を正確に理解していたとは考えられない。同書においては、終戦後まもない大森の状況を同書4章「戦争は終わっても」とのタイトルで記述しているが、本人と家族の話題以外は、既刊の文献を引用しその感想を述べるスタイルに終始している。従って、小関の述べる終戦直後の情景・感情が、戦後の60年間における様々な情報を下に「再構築」されている可能性が高い。しかし、同書がエゴ・ドキュメントとして価値が低いのではなく、情報の再構築の中に、当時の体験を経験化し伝えていこうとした意義は大きい。

もちろん、当時、小関は少年でありR.A.A小町園に関しても、その具体的目的等は知る由もなく、「米兵たちがジープを止めて、なにやら陽気にはしゃいでいる様子を見物していた」[小関2005：179・180]と当時を思い返している。

また、小関は、終戦の前年1944年には占領軍慰安施設「小町園」の原型となる施設が、隣接する穴守町にあったことを国家の罪として批判的に述べている。これは、小関の戦争体験、大森での市井の人として生きてきた故の、素直な感情だと理解できる。

おわりに

本章では、分類上、日記と回想録を分けて分析した。日記は、オンタイムで記されたものであり、当時の社会・文化的背景の枠の中で論じられ、その意味では当時の社会背景・文化が市井の人々の思考回路にどの様に影響を与えたのかを理解することができる。他方、回想録は後年、まさに自らの人生を顧みて記憶や発行された文献を頼りに「回想」することから、その間の見聞に多分に影響され、記憶も曖昧となり書き換えられている場合が多い。また、回想録における書き手自身による分析も、執筆された時代の社会的文化的水準の影響を受けていると考えられる。

R.A.A等の占領軍慰安施設は、日本政府、警察組織、そして占領軍が直接関わり設置され、多くの女性が性暴力を受けた。また、設置後半年で占領軍の司令によりオフリミツとなり、何の保障もされず放り出され、多くが街娼（パンパン）になり売春をせざるを得ない状況に置かれていた。占領軍慰安施設は、政府にとっては日本の恥部なのかもしれないが、事実として国がその真相を明らかにしていく責任もあるし、戦中の従軍慰安婦問題と同様に「性暴力・人権問題」として真摯に向き合うことが必要である。

〈注〉

- (1)高見順は、1907年福井県生まれ。1930年に東京帝国大学卒業後、『故旧忘れ得べき』で注目され作家となる。小説発表とともに詩作にも力を入れた。また、膨大な日記類も残したことで有名である。
- (2)大佛次郎は、1897年横浜市生まれ。1921年東京帝国大学卒業と同時に小説家としてデビュー。『鞍馬天狗』シリーズで次代小説家として有名になった。
- (3)三業地とは、芸妓置屋、料亭、待合からなる三業組合が組織されている区域。
- (4)山田風太郎は、1922年兵庫県養父郡関宮村生まれ。終戦当時医学生で、生涯に100冊を超える小説を書き、ノンフィクションも得意とした。
- (5)山田『新装版 戦中派不戦日記』の「あとがき」で、「結局これはドラマの通行人どころか、『傍観者』の記録ではなかったかということである。（中略）或る意味で最劣等の若者であると烙印を押されたことでもあった」[山田2002：682]としている。
- (6)徳川夢声は、1894年鳥根県益田市生まれ。1913年に無声映画の活弁士となり名を馳せる。戦中は、漫談演劇に転じ、その頃よりNHKラジオでも活躍した。戦後には、小説やエッセイの執筆もこなす様になった。
- (7)吉村昭は、1927年東京日暮里生まれ。生家は紡績工場等を営み比較的裕福であった。家庭においては文学的環境ではなかったが、中学に進学後、兄英雄の影響で芥川賞・直木賞受賞作の書籍を読む様になり、小説に関心を持つ様になった。
- (8)小林信彦は、1932年東京日本橋生まれ。製菓は、江戸時代から続く和菓子屋で比較的裕福な家庭環境で育った。幼少期から浅草で映画や演劇に親しみ、高校時には映画研究会を立ち上げ文化文芸に関心を持つ様になった。早稲田大学卒業を前に、就活でマスコミを受けるも失敗、不本意ながらサラリーマンになり鬱積する中で推理小説や大衆文学を読み漁り、小説に興味を持ったと言われている。
- (9)小関智弘は、1933年東京大田区生まれ。工業高校を卒業後、生まれ育った大田区周辺の町工場で旋盤工として働き、

1960年代から同人誌に小説やエッセイを発表す様になる。1977年発表の『錆色の町』では、直木賞候補ともなった。一貫して下町の一工員としての姿勢を崩さず、市井の人々を活写している。

〈引用文献：アルファベット順〉

- ・ Dekker, R. 2002. Jacques Presser's Heritage: Ego documents in the Study of History, Memorial Civilization, May 2002.
- ・ 橋本嘉夫1958『百億円の売春市場』彩光新社、1958年。
- ・ 長谷川貴彦2020「エゴ・ドキュメント研究の射程」、長谷川貴彦『エゴ・ドキュメント歴史学』岩波書店、2020年。
- ・ 神奈川県警察史編さん委員会1974『神奈川県警察史 下巻』神奈川県警察本部、1974年。
- ・ 小林信彦1995『一少年の見た〈聖戦〉』筑摩書房、1995年。
- ・ 真壁昊1978「生贄にされた七万人の娘たち」、猪野健政1978『東京闇市興亡史』草風社、1978年。
- ・ 大佛次郎2007『終戦日記』文藝春秋社、2007年。
- ・ 小関智弘2005『東京大森海岸僕の戦争』筑摩書房、2005年。
- ・ 高見順2005『敗戦日記』中央公論新社、2005年。
- ・ 徳川夢声1960『夢声戦争日記 第五巻 昭和二十年』中央公論社、1960年。
- ・ 山田風太郎2002『新装版 戦中派不戦日記』講談社、2002年。
- ・ 吉村昭2001『東京の戦争』筑摩書房、2001年。